

生物多様性ユースレポーター 2021年度活動報告書



一般社団法人 Change Our Next Decade
<https://condx.jp/>



Twitter



Instagram



Facebook



COND

一般社団法人 Change Our Next Decade

INDEX

1. 生物多様性ユースレポーターについて	2
2. レポーター紹介①琉球大学エコロジカル・キャンパス学生委員会	4
3. レポーター紹介②Getting Associate Into Action (GAIA)	5
4. インタビュー	6
琉球大学エコロジカル・キャンパス学生委員会	
Getting Associate Into Action (GAIA)	
ジンデ池生物研究所	
高知商業高等学校ジビエ商品開発・販売促進部 (ジビエ部)	
5. 日本の若者の生物多様性に関する意識調査	8
6. インタビュー協力団体	10
7. メッセージ/謝辞	11



生物多様性ユースレポーターについて

概要



生物多様性ユースレポーターは、地域での生物多様性保全や環境活動を実施するユース団体の方に「生物多様性ユースレポーター」を担っていただき、ユースによる地域に根付いた生物多様性保全に関する取組や優良事例の可視化を試みた取組です。

また、各地域の自然情報や地域に根付いたユースの活動の発信を効果的に行うことで、生物多様性などに興味関心がない一般市民や同世代のユースの関心を高め、「生物多様性ユースレポーター」同士のネットワークを構築し、ユース特有の悩みである情報不足、ネットワーク不足の課題を解消することを目的としています。

生物多様性ユースレポーターには、定期的にSNSを用いて情報発信を行ってもらったり、YouTubeチャンネルにてインタビューに出演していただきます。

生物多様性サミットでの発表

生物多様性分野における課題について「自分ごと」として考え、行動するためには？



生物多様性サミット

2022年2月19日(土)
10:00~17:10

参加費：学生 1,500円
社会人 3,000円
※COND準会員様は半額となります
定員：学生200名、社会人200名
参加方法：オンライン (zoom)

<p>[午前の部] 10:00-12:30</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オープニング ・午前の部の紹介 ・登壇団体の紹介、パネルディスカッション 「取り組みを知る一歩分野の取組から学ぶ 生物多様性との関わり」 ・協賛企業の紹介 	<p>[午後の部] 13:30-17:10</p> <ul style="list-style-type: none"> ・午後の部の紹介 ・生物多様性レポーターの活動報告 ・登壇者紹介 ・分科会ごとの講演とグループワーク 「自分にてきる取り組みを考える」 分科会①ESG投資から考える社会課題の解決 分科会②グリーンインフラから考えるこれからの発展 分科会③行動実習から考える活動のヒント
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

主催：NPO法人エコ・リーグ、一般社団法人 Change Our Next Decade
連絡先：secretariat.cond@gmail.com

「生物多様性サミット」は、2022年2月19日(土)にNPO法人エコ・リーグとCONDで共同開催したオンラインイベントです。午前の部にはパネルディスカッション、午後の部では分科会を実施し、生物多様性に関連する様々な社会課題の解決に取り組む方々の視点をふまえ、どのように行動を起こしていったら良いのかを考えるきっかけを提供することを目指し実施しました。

生物多様性サミットでは午後の部の冒頭に、日本各地で活躍する様々なユース団体を招き、生物多様性保全にかかわる活動を発信しました。その中で、生物多様性ユースレポーターとして、「琉球大学エコロジカル・キャンパス学生委員会(琉大エコキャン)」と「Getting Associate Into Action(GAIA)」が発表を行い、これまでの活動や今後の展望について発表しました。



琉球大学エコロジカル・キャンパス学生委員会 (琉大エコキャン)

結成日 2012年12月
構成員 琉球大学に在籍する学生18人



学内では「琉大エコキャン」の名で親しまれており、活動目的は、①学内の環境に配慮した取り組みを知り、身近な環境への関心を高めること ②環境問題の多面性を理解し、具体的な行動に移すことが出来るようになること ③より快適なキャンパスライフを目指し、学生の主体的で自由な発想に基づいて行動すること、の3点としている。

これらの活動目的を達成するため、琉大エコキャンでは、ピーチクリーンやキャンパスクリーンなどの清掃活動や、キャンパスエコツアー、リ・リパックの回収、ペットボトルキャップの回収といっ

た大学の学生全体を巻き込んだ活動もしている。中でも、リ・リパックやペットボトルキャップの回収は外部の団体や企業と連携して実施しており、琉大エコキャンの環境保全活動はキャンパス内にとどまらず、大学外でも幅広く活動を行っている。

また、メンバーの学年は1年生から4年生と幅広く、様々な学部が所属している。大学生ならではの視点や機動力を活かし、学部・学科の垣根を超えた多様なアイデアを生み出しながら、今後も、学内外にて環境活動を行っていこうと考えている。



Getting Associate Into Action (GAIA)

結成日 2020年3月
構成員 高校生から社会人を含む約70名



2020年、愛知県が「SDGs未来都市」に選定されたことをきっかけにユースの活動を促進していくために愛知県の支援の下、結成。大学生や専門学生を中心に、高校生から社会人まで、幅広いユース世代のメンバー約70名が参加している。次世代を担うユースが中心となり、「生物多様性の輪を広げていく」ことを目指し、多様な主体と連携しながら保全活動と情報発信を軸に愛知県内各地で活動している。

GAIAは、様々な主体が連携して生物多様性保全の活動を県

内9地域で展開する「生態系ネットワーク」と連携し、企業やNPO等が関わる保全活動に体験参加しながら、生物多様性の現状や課題について学び、課題解決の方法について検討している。具体的には、海浜清掃、植樹、植生調査及び外来植物の駆除、野鳥観察、稲刈り、竹林整備などの活動をしてきた。また、これらの活動での学びを踏まえ、若者ならではのアイデアでユース主体の保全活動を企画し、よりユースが生物多様性保全を先導していけるよう心掛けている。



琉球大学エコロジカル・キャンパス学生委員会 (琉大エコキャン)

インタビュアー：COND事務局 豊島亮

沖縄県の琉球大学で活動する「琉球大学エコロジカル・キャンパス学生委員会 (琉大エコキャン)」は環境問題やSDGsをより身近に感じてもらい、楽しみながら広めていくことを目的とした学生委員会である。

琉大エコキャンは、異なる学部生によって構成されている。実際、メンバーには医学部、農学部、人文社会学部といった多様な学生が集まっている。そのため、各学生の専門性や特技を活かすことで、独自の視点で問題を捉えることが可能となり、問題の複雑さや多面性について俯瞰して考えることができるという。

琉大エコキャンでは、キャンパスエコツアーやビーチクリーンなどの活動をしている。

しかし、現在は、新型コロナウイルスの影響で多くの活動が制限されている。例えば、ビーチクリーンは、清掃活動を通じて地元の方々と交流する機会でもあったが、接触と密を避けるために規模を縮小し、琉球大の学生のみで実施している。また、新型コロナウイルスの感染拡大が収束しない今、新規メンバーは現地での活動内容は耳にするだけで、実際に活動をしていた先輩方は卒業し始めて



しまっている。地域での活動を主軸にしている琉大エコキャンの活動はコロナの影響で大きな打撃を受けた。しかし、彼らの活動が止まることはなく、コロナ禍でもできるSNS発信や動画作成に力を入れ前に進んでいる。

そんな琉大エコキャンは、「生物多様性」、「環境問題」、「SDGs」といったキーワードは、現代の日本人からすると自分には関係ないことだと思われてしまいがちだが、実は身近なところにあるため、行動や心の持ちようが変わることもある、ということを通して伝えていきたいと考えている。

ジンデ池生物研究所

インタビュアー：COND事務局 豊島亮

高知県須崎市に位置するジンデ池で、昆虫を中心とした生物調査を行うジンデ池生物研究所。地域に根ざしたジンデ池の生物多様性を守るため、日々生物調査に励んでいる。

ジンデ池は、西日本豪雨で決壊したことをきっかけに、市によって廃止することが決められた。しかし、ジンデ池で調査をしていた所長の植村優人さんは池の生物多様性や在来種の多さの貴重性を市長に直接説明し、このはたらきかけの甲斐あって、無事に廃止の中止が決定された。それだけでなく、ジンデ池を自然環境の保護と防災の両立を可能とした工事を施すまで市長を説得した。このような結果の背景には、ジンデ池生物研究所による長期的な調査があると植村所長は言う。長期的なデータの収集はジンデ池の理解を深めるのに役立つ。例えば、夏は気温上昇のため水が減ってしまうことから、水中昆虫が減ってしまうこと等がジンデ池生物研究所の調査で明らかとなった。また、ジンデ池が地域に根ざした池であり、活動している若い人たちと高齢の方を繋いでいるという役割もジンデ池生物研究所の魅力でもある。

ジンデ池生物研究所の設立に伴い、メンバーが増えたことで生



物調査がよりしやすくなった。その一方で、活動しているメンバーが小中高生ということから保全に関する知識に限界があるという点がジンデ池生物研究所の課題である。しかし、そのような課題についても、高知大学の教授や専門家と協力するなどして乗り越えようと日々活動を実施している。そんなジンデ池生物研究所の植村所長は、何気なく過ごしているところでも、様々な生物が生息しており、そのような生物がいる環境を守っていくことが大事だと考えている。

Getting Associate Into Action (GAIA)

インタビュアー：COND事務局 豊島亮

愛知県内で生物多様性保全活動を実施する GAIA。メンバーは年々増加しており大学生と専門学生の他、高校生も数名参加している。規模が大きくなるにつれ、愛知県内での認知度が少しずつ上がっている。この度、愛知県以外の地域の方にも GAIA について知ってもらいたいという想いから、今年度の「生物多様性ユースレポーター」を引き受けた。

GAIA では「保全活動体験」に注力しており、様々な企業や団体が実施する生物多様性保全活動に参加し、体験をしている。実際の保全活動に参加することは十分魅力的だと考えられるが、GAIA のメンバーは現状に課題を感じている。基本的に、GAIA の保全活動は他団体の活動に参加する形で実施しており、これでは主体性に欠けているのではないかと GAIA メンバーは考えている。このような課題を解決するために、最近では「愛知こどもの国」の協力の下、草刈りをしてホテルの生息地を確保する活動を企画し実践している。

このような活動をしている GAIA は、ユースが主体的に活動している事を強みだと考えている。環境系の団体は、環境に関する知識



が多い人が集まりやすく、専門的な知識がまだあまりないユースや学生にとって環境団体は敷居が高く感じてしまう。しかし、GAIA には環境を専門としていないユースが多く集まっており、楽しみながら現場について知り、どうすれば現状を改善できるのかについて考えることを大切にしている。また、地域の保全活動では高齢者が多いことから、ユースも生物多様性保全に貢献しようとしているということを知ってほしいと思うと同時に、より多くのユースが保全活動に参加してくれることを願っている。その想いは愛知県民に伝わりつつあり、最近では小学生も GAIA のメンバーとして活動している。

高知商業高等学校 ジビエ商品開発・販売促進部 (ジビエ部)

インタビュアー：COND事務局 坂浦友珠

平成 30 年の夏、授業で野生生物による自然環境への影響に関する現状について学び、「ジビエ」を活かして解決を図りたいと考えた生徒を中心に高校の部活動として「ジビエ商品開発・販売促進部 (ジビエ部)」を発足した。ジビエ部は、ジビエを活用した商品開発や販売を行い、その利益を森林保護に寄付して循環型社会貢献を実現することを目的としている。

現在は、商品開発に興味を持つ 5 代目の部員が活動を行っている。ジビエはしっかり調理すると臭みもないことから、シカやイノシシの肉に対する偏見を減らし、そのおいしさを伝えるため、日々メニューを考えている。また、商品のアイデアだけでなく、使いたい食材を企業に提案することで、連携を図り、商品化を進め、実際にレストランでの販売も実施している。ジビエ部では、メニューを考える際に、誰もが頻りに食べられるメニューを目指している。たとえば、おやきやオムライスなどのメニューを考案し、そのほとんどが商品化されてきた。中でも部員に人気の商品はカレーパンだ。「ジビエ感」が 1 番少なく、具材が多くて食べ応えがあることが理由だという。その他、レストランのみで販売しているジビエカレーも部員に人気がある。



一方、活動するにあたって感じる課題もある。新型コロナウイルスの影響でジビエの商品を販売する場所が減ってしまったことや、鳥獣特有の臭みを取り除くのが難しいことなどである。しかし、「高校生が行う活動だから」と興味を持ってもらえることもあると考えており、いまのうちにできることをやりたいと考えているという。ジビエにあまり興味がない人であっても、「学生がやっているから」と気にかけて、活動内容を知ろうとしてくれることがジビエ部の強みだと考えている。その強みを活かし、山や海の豊かさについて、ジビエを通してみんなに伝えたいと話していた。友人や顧問の先生に誘われたことがきっかけで入部した生徒が多かったが、「やってみたら面白かった。」と言う生徒がほとんどである。今後も、楽しみながら商品開発を続け、ジビエの魅力を伝えていってほしい。

日本の若者の生物多様性に関する意識調査

©Change Our Next Decade 画像の無断転載・引用を禁ず

生物多様性に対する若者の関心や意識の現状

図1 COND行動変容モデル

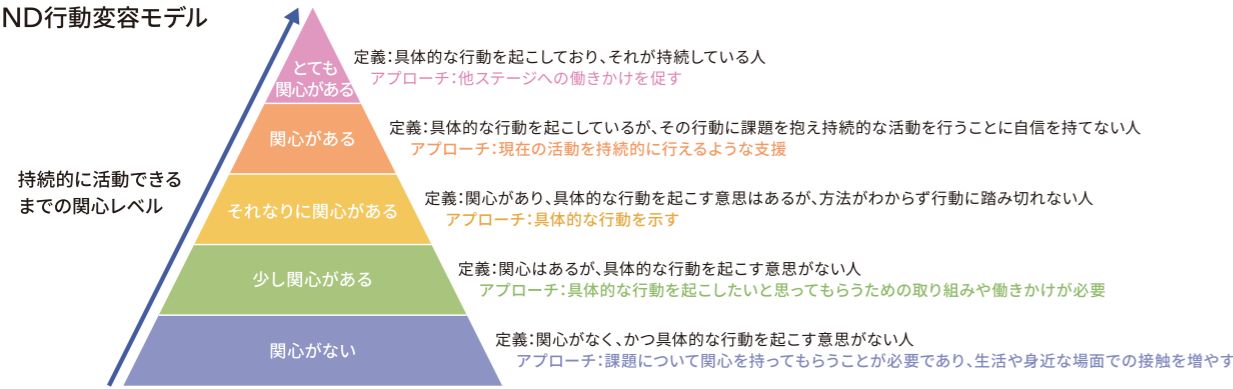


図2 生物多様性に対する関心度

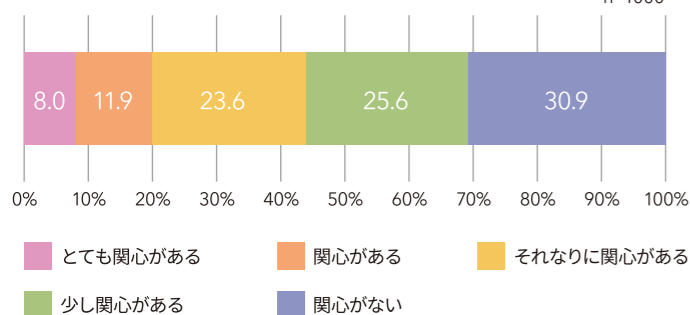


図3 生物多様性の認知度

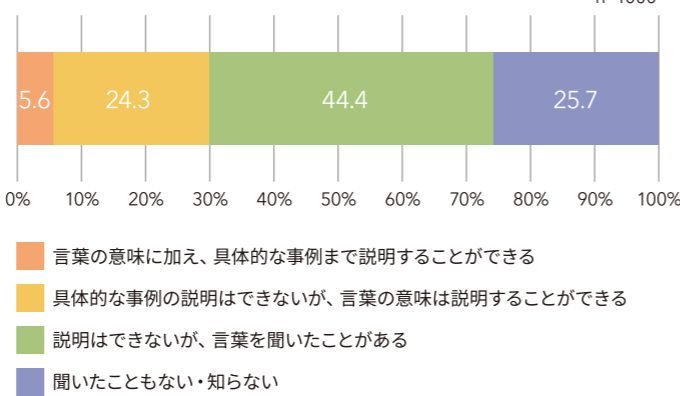


図4 生物多様性に関する考えや印象

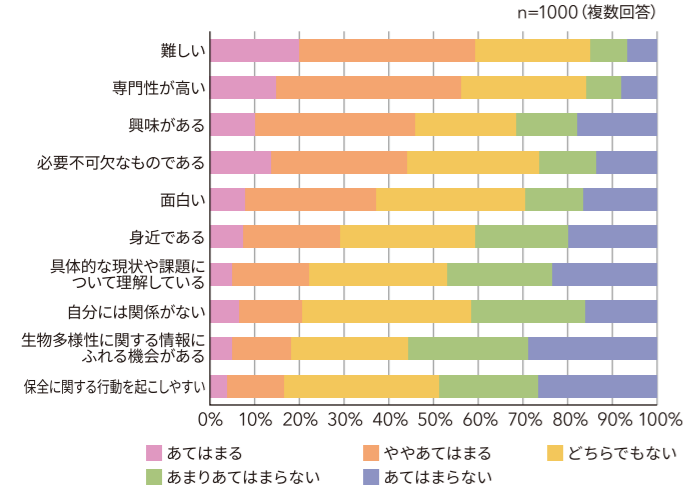
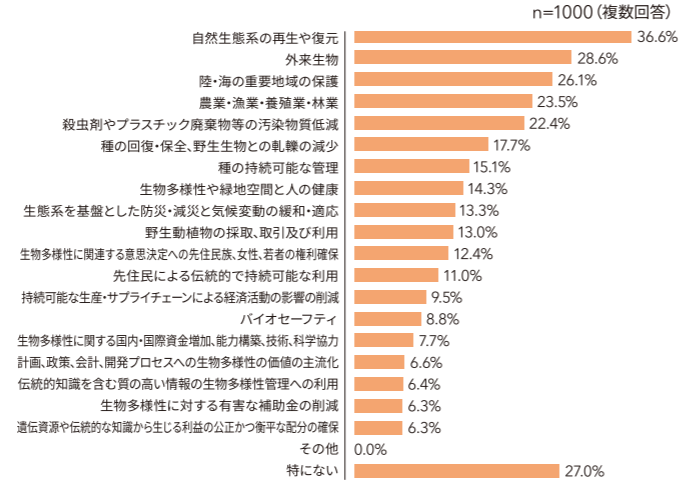


図5 生物多様性に関して知りたいこと



約7割の若者が生物多様性について関心があるものの、全体の約半数の人が行動を起こす意思はないもしくは行動に踏み切れていないことがわかりました(図2)。また、生物多様性について具体的な事例や言葉の意味について説明ができる人は全体の3割程度であり、多くの若者が生物多様性について説明することができないという現状でした(図3)。この要因として、生物多様性を「難しい」「専門性が高い」と考える人が多く、「生物多様性に関する情報にふれる機

会がある」人が少ないこと等が関係しているのではないかと考えられます(図4)。さらに、現在検討が進められているポスト2020枠組の1次ドラフトを参考に知りたいことについて聞いたところ、3割程度の若者が「知りたいことはない」と回答していました(図5)。また、知りたい内容であっても、いずれの項目も選択した人が3割程度と少なく、具体的な内容であっても若者の関心は高くありませんでした。

若者の情報入手方法と用途の現状

図6 よく使う媒体

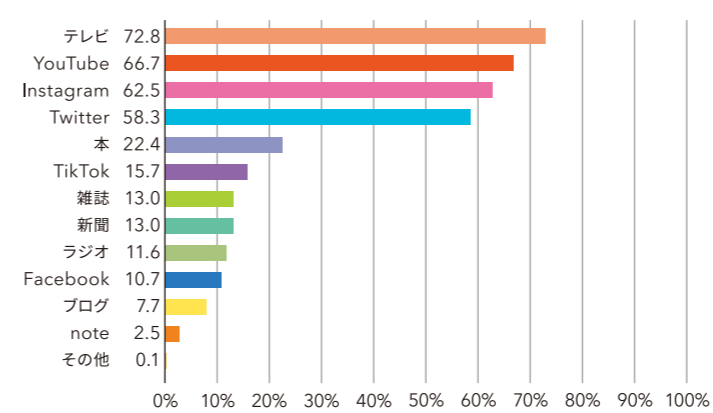


図7 よく使う媒体の利用用途

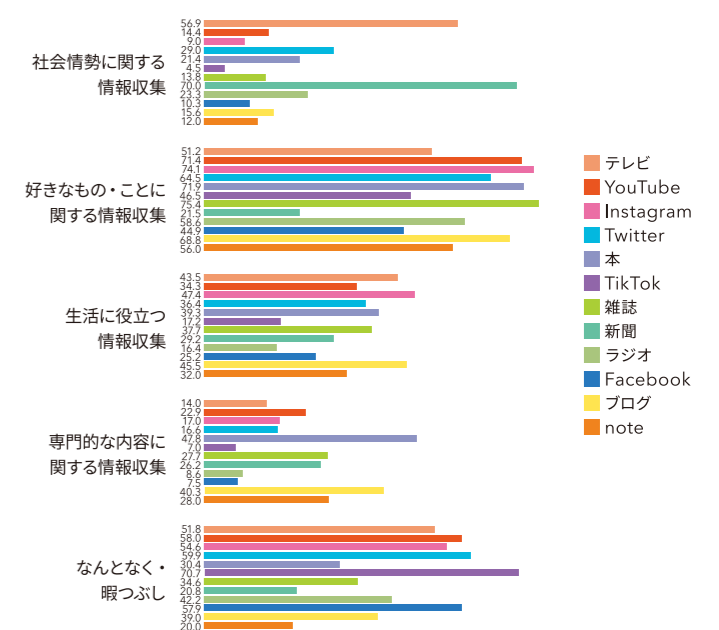
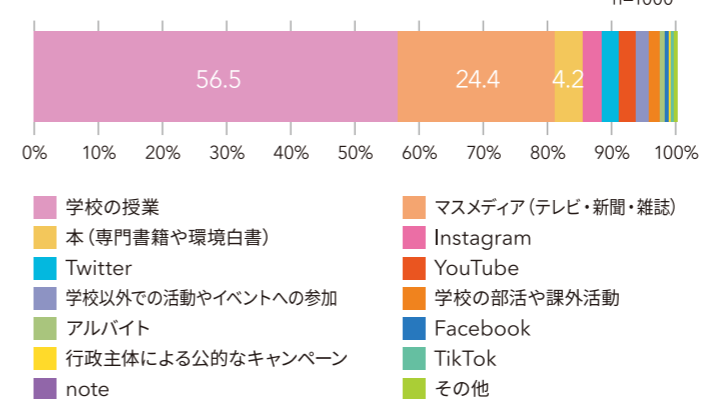


図8 生物多様性を知ったきっかけ



テレビ、YouTube、Instagram、Twitterの順で使用率が高い結果となりました(図6)。しかし、これらの用途について見てみると、社会情勢についてはテレビや新聞、専門的な内容については本が多い結果となりました(図7)。また、現在の生物多様性について知ったきっかけの多くが学校の授業とマスメディアでした(図8)。よって、好きなことや暇つぶしの情報収集用途が高いSNSでの情報発信は現状では効果的ではないという可能性が考えられます。

結果のまとめと今後の情報発信のあり方

本調査の結果から、若者の多くが生物多様性に関心があるものの、具体的な行動を起こしている人は少ないということがわかりました。このことから、少しでも関心を持っている若者に対して、行動を起こせるようなきっかけを発信することが望ましいと考えられます。また、生物多様性について説明できる人が少なく、難しい、専門性が高いという印象を持っている人が多いこともわかりました。現状では、学校の授業やマスメディアをきっかけに生物多様性について知る人が多いものの、その後生物多様性に

関する情報にふれる機会が少ない人が多かったことから、これまでは異なる方法での情報発信が求められます。多くの若者がSNSを利用する一方で、好きなものに関する情報収集や暇つぶしに利用する傾向が高いことから、今後は、生物多様性を身近に感じてもらえるような内容の情報を発信し、多くの若者の生物多様性に対するハードルを下げることが必要であると考えられます。

本調査の目的と調査方法

本調査は、日本の若者の生物多様性に関する意識の現状を把握し、より良い情報発信の方策を練るための基礎データとして2022年2月24日～2月27日にオンラインアンケートを実施しました。回答者の属性は、18歳～30歳の日本各地の若者とし、男性273名、女性727名でした。なお、回答者の居住都道府県が均等になるよう、各都道府県の回答者が21名～22名になるよう調整を行いました。

インタビュー協力団体



ジンド池生物研究所

構成員：小中高生8名程度
結成日：2021年

中学2年生からジンド池で生物調査をしていた所長の植村優人さんは幼い頃から昆虫に興味があった。2021年、植村さんの高校進学に伴い、調査時間の確保が困難になる事や様々な人にジンド池に関わってもらいたいと考え、「ジンド池生物研究所」を旗揚げした。昆虫に詳しい小中学生を中心に生物研究の専門家も加え、メンバーは8名。これにより多分野の調査を行えるようになった。

主な活動としては、月に1回の頻度でジンド池を訪れ、ゲンゴロウ各種、トノサマガエルなどの両生類、ヘイケボタルの調査をしている。他にも、安和地区住民協議会の協力を得て池の重要性を記した看板の設置や、集落活動センターあわとの共催で地域の人に向けて生物多様性セミナーを開催するなど、地域の方の理解も深めながら活動の幅を少しずつ広げている。



高知商業高等学校ジビエ商品開発・販売促進部(ジビエ部)

構成員：13名
結成日：2018年7月

高知県はシカやイノシシによる被害が多いため、その現状を顧問の先生が授業で話したところ、生徒がジビエを活かした部活動を行いたいと言い発足した。ジビエを活用したメニューの考案から商品開発、販売までを実施している。

ジビエの商品を販売する場所が新型コロナウイルスの影響で減ってしまったことや、鳥獣特有の臭みを取り除くのが難しいことが課題だ。

しかし、学生ならではの強みを活かし、ジビエの利活用を継続しながら自然を守るという目標を達成するために日々商品開発を行っている。



特別講義



生物多様性ユースレポーターの能力養成の一環として、2022年3月5日に「どのように生物多様性を伝えるか?」という観点で、共同通信の井田徹治さんに特別講義を行っていただきました。井田さんは、30年以上共同通信社で環境問題について取材している専門家です。講義内では、生物多様性や環境について情報発信をするにあたって留意すべき点や工夫する点などをご教示いただきました。この度、生物多様性ユースレポーター活動報告冊子の出版にあたり、井田さんからユースの皆様にもメッセージをいただきました!



講師

共同通信社編集委員兼論説委員
環境・開発・エネルギー問題担当

井田 徹治



共同通信社で35年近く環境問題取材していた。「生物多様性」という言葉に初めて触れたのは1991年、生物多様性条約の交渉過程取材した時である。もともと生き物が好きだったこともあり、以来、生物多様性の問題が主要な取材テーマの一つになっている。

人類は長きにわたって、自分たちがこの星の上で生きていくために欠かせない自然を破壊しながら、「豊か」になる道を突き進んできました。今や、生物多様性の危機は極めて深刻化し、このままでは人々がこの星の上で豊かで平和な暮らしを続けることができなくなるまでになってしまいました。

気候危機、生物多様性の危機、プラスチック危機、食料危機と今や地球は危機だらけです。新型コロナのような感染症の危機も人間による自然破壊と深く関連しています。問題の同時解決のためには、今の経済と社会の姿を根本的に変えねばなりません。そのために重要なのは一人一人の「ChoiceとVoice」です。少しでも環境へのインパクトが小さい行動や製品を選ぶこと、問題解決に真剣に取り組んでいる企業を選ぶこと、そして、何よりも選挙の時に、問題解決に熱心な議員や首長を選ぶことが大切です。同時に、政治家や企業などに行動を求める声を上げなければなりません。

生物多様性の危機を前に、若い世代の人たちが声を上げ始めたのは非常に重要なことです。ChoiceとVoiceの重要性を忘れずに、問題発生に責任のある現世代にきちんと「落とし前」を付けるように求める声や行動を、これからも盛り上げていってください。

謝辞

新型コロナウイルスの影響で計画変更を余儀なくされることも多かったです。ご関係者の皆様にご尽力いただき、この度、生物多様性ユースレポーターの活動報告冊子を出版することができました。本事業「生物多様性ユースレポーター」は真如苑助成プログラムの一環として実施しております。(株)一如社様ならびに事務局の(一社)環境パートナーシップ会議様には多大なご支援を賜りました。ここに深く御礼申し上げます。

本事業を進め、報告冊子を作成するにあたり、多くの方々にご協力を賜りました。生物多様性ユースレポーターである琉球大学エコロジカル・キャンパス学生委員会様、GAIA様、そしてインタビューにご対応いただいたジンド池生物研究所様、高知商業高等学校ジビエ部の皆様に、感謝の意を表します。また、生物多様性ユースレポーターへの特別講義およびユースへのメッセージを頂戴した井田徹治様、若者の生物多様性に関する意識調査の実施・分析にあたりご助言をいただきました千葉大学園芸学研究院三島孔明准教授に、心より御礼申し上げます。

最後に、本事業遂行にあたり、日頃から多くのご支援・ご協力を賜っております国際自然保護連合日本委員会顧問堀江正彦様にこの場を借りて深く御礼を申し上げます。

一般社団法人 Change Our Next Decade 代表理事 矢動丸 琴子

生物多様性ユースレポーター 2021年度活動報告書 2022年3月31日 初版発行

発行者：一般社団法人 Change Our Next Decade 千葉県松戸市松戸1106番地の1-101号

編集担当：豊島亮、坂浦友珠、矢動丸琴子 デザイン：有限会社アンティグア グッドフェローズ 印刷：株式会社エデュプレス